

現生および化石渦鞭毛藻国際会議 (Dino-6) —ノルウェー・トロンハイム—*

松岡數充**

最近の国際会議には分類群の名称の付されたものが多い。その中でも「現生及び化石渦鞭毛藻国際会議—International conference on Modern and Fossil Dinoflagellates (Dino)—は比較的長い歴史をもつ会議であろう。第1回会議は1978年にアメリカ合衆国のコロラドスプリングスでGSA Penrose Conferenceを主催者として開催された。その後ほぼ4年に1回の頻度でヨーロッパと北米で開かれてきた。第1回会議の主催者がGSAであることからしてわかるように、この会議の出発は地質学・古生物学者がイニシアチブを取っていた。日本古生物学会では最近になってようやく渦鞭毛藻化石に関連した講演が増えてきたが、欧米では1960年代から既に油田開発での地層の対比や根源岩の推定、堆積環境の復元などに利用されてきたこともあって、化石渦鞭毛藻の研究、とりわけ生層序学的研究—が精力的に展開されていた。しかしその背後には化石渦鞭毛藻が遊泳期の栄養細胞ではなく休眠期細胞であることが古生物学者による現生シストの培養実験によって立証されていたこともあって、現生渦鞭毛藻研究者も積極的にこの会議に参加してきた。最近になって化石渦鞭毛藻の生層序学的研究が一段落すると、研究主題はそれに代わって古海洋環境学的研究や自然史科学的あるいは環境学的研究へと移行し、それにつれ、生物学者の参加も増加の様相を見せている。1989年のDino-4 ウッズホールではカナダのMax TaylorとG. Gainsが「餌」として珪藻を捕食する従属栄養種の行動をビデオで紹介したこと、また1993年のDino-5ではJ. M. Burkholderが最近になって日本でも注目されている有毒渦鞭毛藻の*Pfiesteria piscicida*の生活史について講演したことは、生

物研究者のみならず古生物学者からも注目を浴びてきた。このように渦鞭毛藻化石の主要な研究課題が代わりつつある感が強くなるなかで開かれたのがDino-6であった。

会場はノルウェー北部の都市トロンハイムであった。この街はフィヨルドの奥部に位置し、およそ1000年以上も前から都市として栄え、中央部にはノルウェー最古のキリスト教教会がある。現在では人口が約14万人で、オスロやベルゲンについでおり、ノルウェー科学工科大学 (NTNU) を擁する。因みノルウェーには4校の国立大学しかない。トロンハイムはノルウェー海中部のHaltenbanken油田に近く、それもあって、IKU Petroleum Researchや民間石油会社 (Statoil) の研究センターが設けられている。Dino-6は1998年6月7日から13日までノルウェー工科大学 (The Norwegian University of Science and Technology; NTNU) を会場とし、M. Smelror (NTNU) やK. Tangen (OCEANOR) を中心としたノルウェー国内の現生・化石渦鞭毛藻研究者が中心になって開催された。参加者は30か国から約190名であった。内訳は化石研究者が3/5を占めていた。大学関係の研究者は化石・現生を合わせて50%以上で、ついで石油会社の研究者、政府機関 (地質調査所など) の研究者であった。地域別では北ヨーロッパ、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカ合衆国、カナダが多く、日本からは大学・企業の研究者3名が参加した。これまでの会議と同様にアジア人研究者の出席は少なく、この方面での研究者の偏りを感じた。会議はテーマごとに招待講演者とそれに関連した口頭発表およびポスター発表から構成されていた。主要テーマは

1. Dinoflagellate evolution (Taxonomy, Molecular Phylogenetics, Life-Cycles)
2. Productivity of Recent and Ancient Seas

*Dino-6 (Sixth International Conference on Modern and Fossil Dinoflagellates)—Trondheim, Norway—

**Kazumi Matsuoka, 長崎大学水産学部

3. Biogeography and Ocean Circulation (Present and Past)
4. Dinoflagellates and the Climatic Record
5. Dinoflagellate habitats
6. Calcareous dinoflagellates
7. Biochemistry and Fossil Biomarkers
8. Harmful dinoflagellates

であった。この会議の歴史性からして、3、4、7と生層序とを結びつけた発表が多かったが、現生渦鞭毛藻研究者を中心に1、6、8のテーマとの関連での講演も目立った。

次回の現生及び化石渦鞭毛藻に関する国際会議 (Dino-7) はこれまでの開催間隔からして

2002年に予定されている。Dino-6開催以前にM. SmelrorからDino-7の開催を日本で引き受けてくれないかとの打診があった。日本での渦鞭毛藻に関する研究者が少ない現状では簡単に引き受けられるものではないので、国内の化石渦鞭毛藻のみならず現生渦鞭毛藻研究者とともに相談した。その結果、これまでよりも現生渦鞭毛藻に関するテーマ例えば1、2、5、7などをより積極的に取り込むことができれば可能であろうとの判断の下に、Dino-7の開催を日本で行うとの提案をした。会議ではそれが採択された。開催の日程や場所等は未定であるが、2002年にはDino-7が日本で開催されることになった。

案内

地質図の凡例を標準化するためのアンケート調査にご協力を！

地質調査所では、地質図が誰でも理解できるようにすることを旨として、地質図に用いる凡例を標準情報化するための検討を行っております。この作業は、通商産業省工業技術院標準部の支援を得て行われるもので、「標準情報 (TR) 制度」のもとで、地質図を表現するために用いられる記号、色、模様などの標準化、及び地層・岩体の名称などの表現の標準化を図るための資料を提供し、標準となるものを提案することを目的としております。

このたび、この作業の一貫として、ISO710「詳細な地図、平面及び地質断面図に用いる図式記号」(Graphical symbols for use on detailed maps, plans and geological cross-sections)の翻訳を行いました。これは、標準情報 (TR)「地質凡例基準の標準情報」の資料となるものです。ISO710は、「地質凡例基準の標準情報化」に関連した唯一の国際規格であり、「地質凡例基準の標準情報化」にあたっては、これをひとつの基礎として作業を進めたいと考えています。しかし、この規格については、国内では専門家にさえ知られていないという実態があります。そこで、地質調査所のホームページ上で、その翻訳を公開し、これについての皆様方のご意見を広く求めることにしました。下記 URL にアクセスして閲覧の上、ご意見をお寄せ下さい。

ISO710「詳細な地図、平面及び地質断面図に用いる図式記号」のURL：

<http://www.gsj.go.jp/GSJ/ISO.html>

なお、ホームページをご覧いただけない方、詳細を知りたい方は下記宛お問い合わせ下さい。

〒305-8567 茨城県つくば市東1丁目1-3

地質調査所地質部気付 地質凡例基準の標準情報化に関する研究グループ

電話：0298-54-3651

ファックス：0298-54-3653

(地質凡例基準の標準情報化に関する研究グループ代表：鹿野和彦)